



リアム・スカーレット振付『アスフォデル・メドウズ』でのルパート・ベニファーザーとマリアネラ・ヌエス Photo: Johan Persson 『ジゼル』リハーサルでのクセニア・オヴシャニク Photo: E. Kauldhar

今月号の主な記事 目覚ましい若手の活躍

L・スカーレット/X・パリッシュ/K・オヴシャニク/J・デ・オリベイラ・ソウザ

今月号では、若い世代の活躍を中心に伝えたい。まずはロイヤル・バレエのリアム・スカーレットについて。現在二十四歳のスカーレットはこのたびロイヤル・オペラハウスの大劇場での上演のための初の振付作品を発表し、大きな成功を収めました。その『アスフォデル・メドウズ(Asphodel Meadows)』を、デボラ・ワイスは次のように評します。「快挙と呼ぶべき新作。美しく、均整がとれ、陶酔に誘う音楽性があり、この若さからすれば例外的なほど成熟している。通路で踊りだしたくなるような、もう一度最初から観たくなるような作品で、スリングの一語に尽きる。スカーレットは創作意図について、感情を排した抽象作品にしたかったとプログラムの解説で説明している。だが人が(善人も悪人も)死後に住む地下世界を指す作品名からも、その示唆するテーマは明確だ。様々な種類の感情は、純粋にダンスによって表現されている。何より彼は、それぞれのダンサーの才能をみごとに引き出した。振付家自身がドリーム・キャストと呼ぶ顔ぶれで上演できたことも、大きなメリットだった。」

その『アスフォデル・メドウズ』に主要な女性役の一人として出演したタマラ・ロホも、スカーレットへの賛辞を惜しみません。「凄く才能がありますね。前途洋々で、このバレエ団でもっとも期待できるひとりだと思います。それに一緒に仕事をしていて気持ちのいい人でもあります。振付は、彼の中から次々に湧いてくるんです。誰も彼を止めることはできないし、同じペースで付いていける人はほとんどいないんです。」ロホはインタビューの中で、スペインの政治情勢と、同国に古典バレエを専門とする国立カンパニーが存在しない理由についても語っています。

マイク・ディクソンがインタビューしたのは、ロイヤル・バレエからマリンスキー劇場に移ったザンダー・パリッシュです。移籍によって給与は半減。けれども到着してみればすでにコリフェの地位を与えられ『シヨピナーナ』にキャストイングされました。それが『レ・シルフィード』だと気づかなかったパリッシュは、どんな役なのか尋ねましたが、もちろんこのバレエに男性は一人しか登場しません。そしてその四日前には、『ライモンダ』第三幕のパ・ド・カトルを踊りました。「全幕バレエの中で演技もパートナーングもあるソロ役をもらうというのは、素晴らしい経験ですね。ロンドン時代にもこの踊りのステップは習っていましたが、全幕を知らなかったのだからどんな場面なのかは理解していなかったんで

す。それで同じ役を前日に踊ったダンサーに、入退場はどこからなのか聞いたら、とても親切に教えてくれました。今からマリンスキーの舞台で初めてのソロに出ていくというとき、『これは凄いです』と思いました。傾斜舞台でしたが、怖いとは思いませんでした。解放されたように感じたんです。皇帝のボックス席の正面で、リラックスして踊れましたよ。踊り終えたら、団員みんながお祝いを言ってくれました。」初舞台に続いてパリッシュは、移籍したそのシーズンに『白鳥の湖』のパ・ド・トロワを踊り、『セレナーデ』『エチュード』にも出演し、批評家たちの賞賛を浴びました。「ユーリ・ファデーエフやウラジーミル・シクリャロフと一緒に仕事をするのが大好きです。彼らと同じリハーサルに出ているのを光栄に思います。友達もできたし、このバレエ団は最高です。ホームシックなんて無縁です。」

今月の「フォーカス・オン・ア・ヴァリエーション」の課題曲は、ジゼルの第一幕のソロ。指導はメイナ・ギールグッド、ダンサーはイングリッシュ・ナショナル・バレエのクセニア・オヴシャニクです。『ジゼル』の音楽はアドルフ・アダンの作曲ですが、このヴァリエーションはミンクスによるものとされています。アントン・ドーリン出演のあるドキュメンタリー映像の中のインタビューで、オリガ・スペシーフツェワは、これが自分のソロで元々の『ジゼル』には含まれていなかったと明言しています。オヴシャニクはイングリッシュ・ナショナル・バレエ学校を卒業してまだ二年になりませんが、先月号のこのコーナーでアルブレヒトのヴァリエーションを習い、これも初役のジュノール・デ・オリベイラ・ソウザを相手に、ロンドンから南西に少し離れたウォーキングで、ジゼル役デビューを飾りました。マギー・フォイヤーはこの舞台を次のように評します。「オヴシャニクは痛々しいほどに若いですが、他の村娘たちとは明らかに異質な、感情面での成熟の核を盛ったジゼルだった。彼女がバチルドにマイムで語った踊りへの愛は、ヴァリエーションの中でそのとおりに示されていた。長いバランスを取るのも、片足のポワントでホップを繰り返したり回転したりするのも、ただそれが楽しいからであり、すべてはみごとなクラシックのラインと美しいポジショニングの足に支えられていた。ソウザは古典的なプロポーションとプレイスメントのアラベスクがみごとで、ふたりが腕を組んでバロテをする場面などでは、うっとりするような調和を見せた。」(翻訳:長野由紀)